

第2回 木曾三川下流域自然再生検討会 議事概要

日 時：平成21年3月23日（月） 10:00～12:00

場 所：木曾川下流河川事務所 1F 会議室

1. 開会

2. 挨拶（木曾川下流河川事務所長）

3. 委員の紹介

4. 議事

（1）第1回検討会 議事概要の報告

- ・ 第1回 木曾三川下流域自然再生検討会の議事概要の報告がなされた。

（2）木曾三川下流域の環境上の課題について

「木曾三川下流域の環境上の課題について」の説明を受け、質疑がなされた。主な意見などは以下のとおりである。

[主な意見など]

○木曾三川下流域の変遷について

- ・ 木曾三川下流域は、昭和49年位までに1m近く地盤沈下し、以降も常に数cm程度沈下している。一方、ダムでの堆砂により上流からの土砂供給が減少しているにもかかわらず、干潟の減少を地盤沈下だけが原因と捉えられるような形での整理となっているが、それでいいのか。
- ・ 伊勢湾に流入する総淡水量に対する木曾三川の総流出量が占める割合を示して欲しい。

○人為的要因と河道の変化について

- ・ ヨシ原面積の減少は、護岸の整備などの人為的な要因にもよると思う。

○木曾三川下流域の河川環境について

- ・ 樹林が広がる背割堤付近では、背後に養老山地があることなども影響し、高木に生息する野鳥や小型の猛禽類などが多く、特に冬鳥は100種類以上確認されているので、それも明記して欲しい。
- ・ 揖斐川支川の多度川・肱江川は隣り合った河川にも関わらず、各々の生物相等が異なる。また、こうした小河川は農業用水路など背後域とのつながりのルートや、生物の産卵や生息の場となりえる。
- ・ 長良川の新たな湛水環境に関しては、それに依存する生物には外来生物もいると思うが、このような環境を好む在来生物もいるわけで、それをいかに評価するかも課題と考えられる。

○木曾三川下流域の河川環境の変遷について

- ・ 本来、干潟がなかった場所に干潟を造成しても人為的に維持することが必要となる。もともと干潟のあった場所ならば、一度造成・整備すれば地盤沈下も安定しており再生する可能性が高い。

○木曾三川下流域の環境上の課題について

- ・ 農地からの排水や生活排水等が直接河川へ流入している状況で、ヨシ原や干潟にこれらの排水による負荷に対して水質浄化の効果を求めるのは難しい。

- ・ ケレップ水制群周辺の自然環境を変化させた原因を考えると、その再生のためには人為的に手を加えることも考慮されるべきである。とくに、ケレップ水制群の陸域化については積極的な対応も考えていく必要がある。
- ・ ホテイアオイ、ウォーターレタス等の外来種がかなり増えてきており、対策が必要である。なお、ヨシ原があれば、それらの外来種の繁殖を抑制できると思う。また、柳の繁茂の抑制にも効果があるかもしれない。しかしながら、木曾三川下流域のヨシ原で種子が採取できなかった現状では、自家不和合性のヨシの繁殖は望み薄であろう。
- ・ 産業廃棄物等の不法投棄が増えている。対処は難しいが課題として明記すべきである。
- ・ 昔、河川に生えていたヨシやヤナギは地元で燃料として使われており、地域と河川とは日常的な結びつきがあった。今は、枯れたヨシやヤナギなどは放置されており、それによる火災がしやすい状況なので対策を考えてほしい。

(3) 木曾三川下流域における自然再生の考え方

「木曾三川下流域における自然再生の考え方」の説明を受け、質疑がなされた。主な意見などは以下のとおりである。

[主な意見など]

○全般について

- ・ 縛りの厳しい目標より、「河川は生き物で定常状態はないので、固定的な目標値を維持することは難しい」という認識のもと、目標には流動性や三川間の関連性を持たせるべきである。
- ・ 季節感のある目標がよい。

○自然環境について

- ・ 干潟・ヨシ原の再生後、河川管理者が維持管理を行っていくのかどうかを示して欲しい。
- ・ 干潟・ヨシ原の再生箇所のモニタリング調査を重点的に行ってほしい。
- ・ これまでに実施してきた再生事業について、その評価の考え方を示してほしい。
- ・ 再生目標は、何がどうなればよいのかを想定して定めないと、成功した、あるいは、しなかったとはいえない。漠然としたことでは成功とはいえないので、ある一定の明確な目標を設定していく必要があると思う。
- ・ 流出土砂と干潟減少の関係性に関しては、まず既存データの分析を行うことが重要である。
- ・ 自然の営力を考えると下流域だけで再生は難しい。上流域の河川・ダム管理者や市町との連携を模索してほしい。
- ・ 植物群落の一つにヨシ原があるという認識のもと、ヨシ以外の植物も生育できる工法の採用にも配慮していきたい。

○社会環境について

- ・ 沿川住民と川との関わりが希薄化しており、再構築が重要である。
- ・ 漁労に携わっている際に、周辺を水上バイク・水上スキーや大きな船などで走られると突如の波浪の来襲や衝突の危険を感じ、非常に危なく困っている。そのような遊びはやめて頂きたいと思っている。
- ・ 船舶等の航行で発生する波浪による河岸への影響も考える必要がある。

(4) 今後のスケジュール（案）

「今後のスケジュール（案）」で、平成21年度も継続する旨の説明がなされた。

5. 閉会

以 上